

手と手、  
夢想

その一 「出会いの喜び」遊び

小学校の校舎一階、長い廊下の東端にある階段を下りてくると、「ともちやーん」とかわいい声がある。そちらを振り向くと、廊下の西の端から、手を振りこちらに走って来るこうちゃん姿

菊地 知子



が目に入る。「こうちやーん」と私も呼んで、「両手を広げて走り寄る。同じように思い切り手を広げて駆け寄るこうちゃんをひしと抱き留め、「会えてよかったー」と言う、「こうちゃんもともちやんに会えてよかったー」

こうちゃんは四歳。我が子の級友の弟で、来春から幼稚園に行く。彼の気さくな母親同様、自分の母親より八つも年長の私を「ともちゃん」呼びわりする、私の小さな友人である。こうして互いに両手を広げ、出会いを喜び合うことも、彼との間ではかなり日常的になっている。

思い出してみると、こうちゃんに限らず、諸手を広げて走り寄り、出会いを喜び合うということ、私は、子どもとの色々な場面で、実は多用している。諸手を広げて出会いを待つと、何故だろう、出会える嬉しさは格段に増す。大人同士、肩をひしと抱いたり、頬をくっつけ合ったりして出会いを喜ぶことの少ない私たちの文化にあって、臆面もなく諸手を広げ、受けとめ合えることが、子どもにとっては、と言うより前に、存外、大人の側に、人の温もりを実感させてくれる稀有なチャンスであるのかもしれない。広げた両手と

同じ分だけ広げた心であなたを待っている、両手で抱きしめたい程、あなたとの出会いが嬉しい、ということを表現するという、いわば「保育的配慮」に託つてはみるが、どっこい、保育とか人間関係とかいうものが、自ずとお互いであることに、又しても思いが至る。

## その二 受けとめ、受けとめられた記憶

### 弟の手

弟が姉の頭を叩いている

まだ不器用そうな小さな手で

けれど小気味良いリズムで、

弟が姉の頭を叩いている

叩いているのだけれど

——うん、うん。いい子いい子、できるのね。

と言って、

姉は頭を差し出してゐる。

寢床で

——おかあさん、おててつなごう。

娘に差し出された手を握る。

——おみずのんでくるから、

おててぜったいそのままにしてまててね。

子どもの手の温もりに代わって、

夜の冷気が私の掌を包む。

私は一時、

私の差し出す手を

子どもがやわらかに拒む目を想う。

そして今は、

掌の中に、

子どもの手かもどってくるのを

しみじみと待っている。

一つ目の記録の「姉」は、二つ目の中の「娘」である。姉四歳、弟一歳の、一九九三年初冬の同じ日に書き留めた二篇だ。戻ることでできる掌、自分を受けとめる手を、私に期待し必要とする、その同じ心が、弟の幼い手のなせる技を愛情と感じ、自らの愛情を以て受けとめようとしている。短いスパンだけで見れば、姉の頭を叩いているその手が、次の瞬間には、猛烈に姉の髪を引っ張っていたりするのだが、少しだけ長期的に見ると、本当に姉を「いい子いい子」する手になり気持ちになってくるので、何ともおもしろい。私がそれを信じて待とうとする時、「いい子いい子できるのね」と、共に信じて待ってくれる姉の健気さは有り難い。

姉の手も、息子の手も、私の手の中に納まる大きさでは、もはやなくなつた。先のこうちゃんだって、頻繁に会うことがなくなれば、未練のな

い忘却は幼き者の常、出会いを喜び合うどころか、私を見知らぬ者のようにさえ振る舞うだろう。

けれども不安や焦燥に震える時には、あるいは歓喜に駆けだす思いの時には、母の手を、あるいは誰かの腕を、かつてと同じように、探りにき

てもいいのだと、幼い日の記憶が語ってくれていたらいい。

(松戸・ひだまり文庫)

## 手当てについて

酒井 朋子

かなり昔、私がまだうら若き女子医学生であったところのお話です。医学部の授業の中で「手当て

とは何であるか？」という、一見、哲学的にもきこえる質問を受けたことがありました。もちろん